

桶狭間村の紹介（伝承）

1 桶狭間村の発祥は1341年頃、（桶狭間の戦い220年前）

南北朝時代、南朝の落武者が20人位、当地に流れて来て山あいの洞穴のようなところに粗末な小屋を造り、隠れ住んだのが始まりと伝えられている。落武者狩りが下火になり、世の中が平静を取り戻した頃、そのうちの半数くらいの人々が土着、荒野を開墾、村作りを始めた。その場所は、桶狭間郵便局の辺りから長福寺に至る間で、昭和40年代まで昼も暗い林の中に、3軒の屋敷跡と2つの古井戸が残っていた。桶狭間は最初に洞迫間、その後洞がクキ、クケとなり公卿迫間、ホケハザマ（法華迫間）に、後にオケハザマ、漢字では桶廻間、桶狭間となったといわれている。

2 衝撃的な桶狭間の戦い

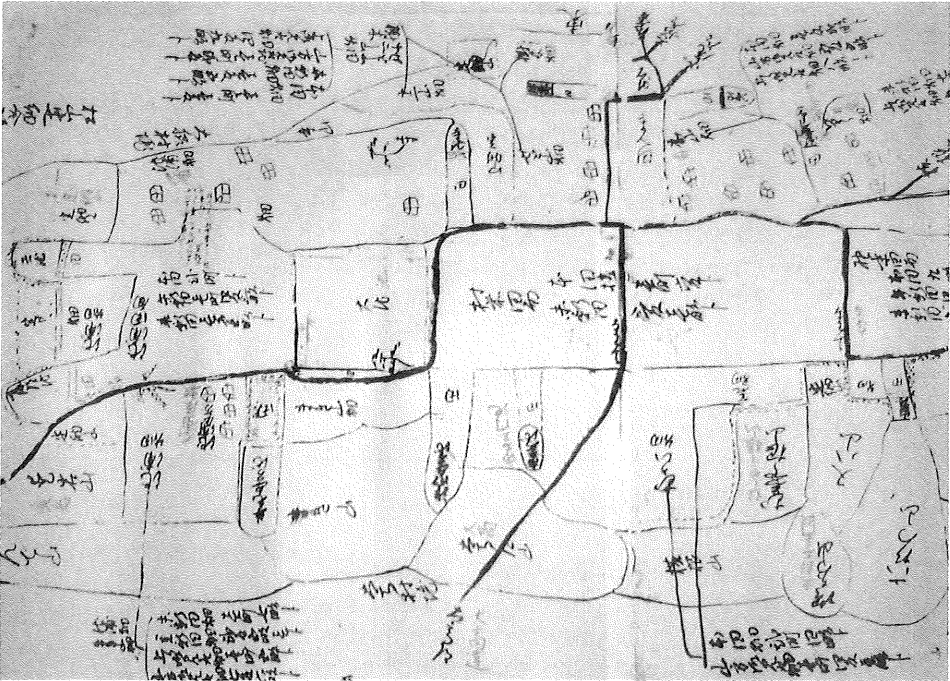
村の発祥から約200年後の永禄3年（1560）5月19日桶狭間の戦いがあった。村に先陣として来た瀬名氏俊から「今川義元が当村に着陣する」と知らされた村人は、徹夜で餅をつくやら、肴を煮るやらの大騒動。当日昼前には、義元公を出迎えて酒肴を献上、大軍が無事通過してくれるのを念願していたと伝えられる。昼頃から雲行きが怪しくなり、稲妻が走り雷鳴が轟き、雨が降り始めて大夕立となった。雷鳴が遠退いた途端、突如として北方から大喚声があがった。悲鳴、怒号、金属の打ち合う音、蹄の音、馬のいななき、まさに地獄の響きというか……。村は一瞬の間に、阿鼻叫喚修羅のちまたと化した。やがて、高々とあげられた勝鬨の主は、その兵力が今川軍の1割にも満たない尾張の「うつけ」と嘲笑されていた信長軍で、大方の予想を裏切った結果となった。こうして、桶狭間の丘にあげられた勝鬨は、近世の幕を開く合図となった。静寂を取り戻した村には、戦死者の屍が累々と横たわり、主のわからない旗指し物が破れて風にはためいていた。折からの夕立で増水した井桁川の流れは朱に染まり、鞍が浮き沈み流れていくのは哀れであったと伝えられている。その後誰と言うとなく、鞍流瀬川（くらながせかわ）と呼ばれるようになった。

3 初めてベールを脱いだ村の姿

合戦から50年後には、はや徳川の天下になっていた。徳川義直が尾張の藩主となった翌年の慶長13年（1608）、初めて村の検地がおこなわれた。「慶長13年戊申10月8日尾州智多郡桶廻間村御縄打水帳」はその時の検地台帳で、村の耕地の場所・面積・耕作者が記入されている。耕地総面積は23町3反3畝16歩、石高211石2斗5升5合であった。この数字は、落人がこの里に土着してから、慶長までの250年間、黙々と荒地を開墾して来たその人等の艱難辛苦の歴史が秘められている。この慶長13年（1608）の後、1822年に刊行された「尾張徇行記」には、田畑36町3反13歩とある。その時より12町9反増加し、戸数67戸、人口は315人となっている。慶長13年時点の耕作者戸数は22戸（屋敷持ちは5軒）であったが、村の発祥から100年位は7～12戸くらいであったと伝えられている。

《 桶狭間で一番古い絵図 》

天明元年（1781）知多郡桶狭間村絵図 “ 桶狭間の戦いより220年後の村絵図 ”



（国会図書館蔵）

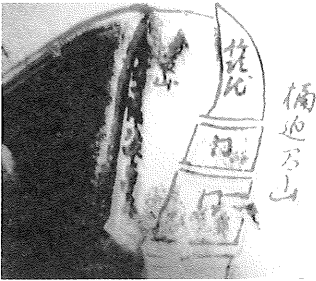
桶狭間の戦いは、現在の名古屋市緑区と豊明市にかけて広がる「おけはざま山」一帯で繰り広げられたと考えられており、両地域には古戦場公園が整備されている。桶狭間の戦いから450年を契機に両地域の交流が始まり、ともに桶狭間の戦いを盛り上げるために知恵を出し合っている。

「信長公記」から読み解く（考察）

1 今川義元の着陣地は何処か？

1・1「信長公記」は、・・・おけはざま山に人馬を休め・・・と書いている。

延享2年（1745）の知多郡大脇村御山絵図に大脇村と桶狭間村との境の桶狭間地区に桶狭間山と記入されている。同図に固有名詞のついでに池を桶狭間池と書いている。これにより桶狭間山の意味は固有名詞でなく桶狭間の山と理解される。



1・2太田牛一の言う「おけはざま山」は何処か？

桶狭間古戦場公園（田楽坪）の東100～150m、高さ30～40mの山と考えられる。

- ① 義元は杓掛より塗輿に乗って来た。「義元は塗輿を捨てて逃げた」と書かれているので間違いない。輿の構造、担ぎ方からして幅 1.5m、高さ 2.5m以上の空間を要するから、樹木のある山での通行は難しい。
- ② 戦当時の道は鎌倉街道であったことは勿論だが、地方道として東浦道、大高道、近崎道、三河道と呼ばれる道も存在していた。義元の一行は元屋敷（大脇村）まで東浦道、大脇村から大高道～近崎道を通っておけはざま山に着陣した。近崎道は想定するおけはざま山の麓まで通じており、この丘は先陣のいる巻山、幕山、高根山が一望でき、近くに水量豊かな泉があり、池沼が3箇所ほど点在していて人馬の飲料水が豊富であった。（戦国時代の武将が展望の利かない狭い窪地に休憩とはいえ、陣を張るとは考え難い。）

2 義元戦死の場所

2・1折からの雷雨と強風で今川本陣は混乱していた。旗や幟の動きでその事を見抜いた信長は、その機を見逃さず命令を下し、本陣を集中攻撃した。ただでさえ混乱している今川軍は、織田軍の急襲に戦う術を失い、大将の塗輿まで捨て敗走した。しばらく踏み留まった旗本の300騎は、義元を真中にして闘ったが織田軍の果敢な攻撃に戦死者続出し遂に50騎程になる。西の深田際まで押され、遂に義元は討死した。義元討死直後、深田で壮絶な斬り合いがあったことが「信長公記」に臨場感あふれる表現で書かれており、かなりの面積の深田が存在した。

2・2合戦から48年後の慶長13年（1608）桶狭間村の検地が行われている。その台帳「慶長13年戊申10月8日尾州智多郡桶廻間村御縄打水打帳」が現存している。その中に池浦田面（池浦とは大池のうら、桶狭間田楽坪を含む地帯で、現在も古老の間でこの地名が使われている。）として、およそ2町歩の深田が存在したことが示されている。

2・3これらの事実より義元討死の場所は桶狭間古戦場公園（田楽坪）の「駿公墓碣」の付近と想定される。同所の西側は昭和60年まですべてが深田であり、合戦より281年後の天保12年（1841）の大脇村絵図によってもこの地（田楽坪）以外に深田は存在しない。

参考史誌図書・資料名

- ・信長公記 昭和44年11月20日発行 角川書店
- ・桶狭間の戦い 現地報告桶狭間の戦い 桶狭間発 “ 桶狭間の戦い ” 連載「地元の古老が語る桶狭間合戦」著書 梶野 渡
- ・郷土史家が検証する桶狭間古戦場 桶狭間風土記 “ 今川義元最期の地の謎 ” 著書 梶野 渡